学位論文審査の結果要旨

博士論文提出者	D18603　　角山　裕美子
博士論文審査委員	主査　職・氏名　　教授　　石田　和子 副査　職・氏名　　教授　　常盤　洋子 副査　職・氏名　　教授　　高柳　智子 副査　職　氏名　　教授　　小長谷百絵　学外　小泉美佐子

博士論文本審査結果の要旨

学籍番号 D18603 角山裕美子から提出された博士論文「在宅終末期高齢がん患者の意思実現にむけた訪問看護モデル - 最期までその人らしさを支援するアプローチ - 」について、令和 6 年 1 月 17 日 8 時 30 分から 9 時 55 分、2 月 1 日 13 時から 14 時 30 分の 2 回、博士論文本審査を行った。

（1）博士論文の概要と評価

本研究は、終末期にある高齢がん患者をケアする訪問看護師が患者の日常生活を送る上での好みや願い、最終段階の医療ケアや最期の場所の選択など患者の意思を引き出し、その意思を実現するための訪問看護師の実際的な支援を可視化する看護モデルの作成を目的としている。研究方法は、研究Ⅰ，研究Ⅱの 2 段階を経て行われていた。研究Ⅰでは、在宅終末期高齢がん患者のその人らしさを最期まで支え、患者の意思実現にむけての支援経験を有する訪問看護師への半構造化インタビュー法による調査から、支援内容および方法を抽出し、それらを質的記述的に分析していた。その結果を基に、在宅終末期高齢がん患者の意思実現にむけた訪問看護モデル案（以下，モデル案）を作成していた。研究Ⅱでは、モデル案の妥当性および実用性について、実践家で構成されたフォーカス・グループ・ディスカッションでの意見と先行文献、事例の分析結果を踏まえてモデル案を修正し最終的なモデルを作成していた。このモデルの作成過程において McEvoy＆Egan（1979）の看護介入モデル開発を参考にし本研究のモデルを作成していた。結果、本モデルは「活動の目標」すなわち「最期までその人らしく意思を実現して生活を送る」を目指す訪問看護師の支援を示していた。モデルの「介入の焦点」は【人生の最終段階の医療ケア最期の場所の選択等のアドバンス・ケア・プランニング（Advance Care Planning ; ACP)】【緩和ケアに焦点を当てたケアの実践】【日々の生活のなかでの意思実現への支援】【在宅（病院）で最期までその人らしく意思を実現し安らかな死に向けた支援】であった．これらの「介入の焦点」に沿って「看護活動」および「具体的方法」を示していた。「成果」は「患者は意思を実現した生活を送り最期までその人らしく生き患者と家族，医療者ら関わる人々が納得して最期を迎えられる」ことであった。考察は、本モデルの独自性として継続的な訪問看護の提供を通し在宅終末期高齢がん患者が最期までその人らしく生き死を迎えられることを目標に患者および家族の意思を汲み関わる人々と合意形成しながら患者の意思実現を支援する一連の看護実践が示されていた。本論文は、在宅終末期高齢がん患者の意思実現に向けた訪問看護師のより良いケア提供に寄与し、老年看護の質向上につながる研究であると評価された。

（2）審査経過

令和 6 年 1 月 17 日（第 1 回）博士論文予備審査からの課題として、論文の完成度を高めるために、①質的研究から看護介入モデルを作成した過程を明確にすること②介入モデル作成における質的研究の対象者数 8 人の根拠の説明③専門家会議・実践者会議・フォーカスインタビューなのか研究計画書に沿って再度吟味すること④誤字脱字の確実な修正、質的分析結果が介入モデルに適した記述になっているの見直しなどを提示しており、これらの修正状況を確認した。①か

ら④について修正されてはいたが、①②については、審査委員が求めている内容には至っていなかった。また、誤字・脱字・意味不明瞭な文章も散見し、再度、修正を依頼した。

令和６年２月１日（第２回）まず、審査委員５名で論文の修正状況を確認した。上記の①②については、わかりずらい表現はあるが修正されていた。しかし、誤字・脱字が確実に修正できていない箇所があり、公開審査までに修正を求めた。

公開審査は研究者のプレゼンテーションおよび口頭試問で行われた。提出された博士論文は完成度を高めており本論文の成果は、在宅で最期を迎える高齢終末期がん患者を支援する訪問看護師のケアの質向上につながる看護モデルを作成したこと研究であり研究者の真摯な態度と努力の賜物であると評価した。

（３）審査結果

博士後期課程論文審査基準により「研究題目」「論文の意義」「論文の内容」「倫理的配慮」について審査を行い、充分に博士論文としての条件を満たしていることを確認した。

Ⅱ　最終試験結果の要旨

以下の項目について試問し、満足すべき回答を得た。

1. 本研究における研究方法の独自性について
2. 本研究の理論とデータに基づいた妥当性について
3. 本研究の結果をどう生かすかについて

以上により、本論文は、本学学位規程に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、最終試験を行った結果、博士の学位を授与することが「適当」であると認定した。